

# ハーンの妻セツの役割の再検討 — 小泉一雄、雨森信成、三成重敬の証言を中心に —

中井 孝子

キーワード ラフカディオ・ハーン 小泉セツ 再話 版本 森亮 小泉一雄  
雨森信成 三成重敬 メアリー・フェノロサ

## 序

日本国籍名「小泉八雲」で知られるラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn 1850-1904) の妻は、日本人のセツ (1868-1932)<sup>1</sup> である。ハーンは、アメリカから 1890 年 4 月 4 日に横浜に到着した。1891 年 2 月上旬から、最初の赴任地松江で、住み込みとしてやって来たセツと暮らす (長谷川 123-140)。<sup>2</sup> 1893 年に熊本で、長男小泉一雄 (1893-1965) が誕生し、1896 年 2 月 10 日に、小泉家の入り婿として日本国籍を取ったのは神戸時代であった (『小泉八雲事典』 218、以下『事典』)。ハーンは、来日以来 14 年間に、『怪談』 (1904)、『日本— 一つの解明』 (1904) 等、1894 年から 1 回の例外を除いて毎年 1 冊、計 11 冊の本を欧米に向けて英語で出版し、1904 年、東京で急逝した。

セツ著とされる「思ひ出の記」の日本での出版は、ハーンの死の 10 年後の 1914 年に田部隆次『小泉八雲』第一版に収録される形 (145-77) においてであった (『事典』 106)。セツ像はこのセツ自身の「思ひ出の記」によるところが大きい。セツは、ハーンの「再話」<sup>3</sup> 創作の「媒体」として、日本の昔話をハーンに話す重要な役割を果たした、かいがいしく家庭を守る良妻賢母であったという像が日本では定着している。<sup>4</sup>

ところが、ハーン研究の先駆者、森亮は『小泉八雲の文学』 (1980) において「生きた媒体としての節子はもっと衣を剥がされねばならない人である。」(66)、「夫人の都合で伏せられた事実もあろうし、細部において記憶違いもある」(114) とする。

また、一雄は、その著書『父小泉八雲』 (1950)<sup>5</sup> において「私の母の『思ひ出の記』の中にさえ誤りの点のあることを認める」(49) とし、「日本の缺點をもお世辞めいて褒める人からは、母を憶う時に似た感を受け」る (252) と暗に虚飾された記述を匂わす。

本稿は、以上の森や一雄の提起する課題を取り挙げ、セツの「思ひ出の記」の証言を検証することを試みる。再話に関して唯一の証言をするセツが、本当にすべて自分で古文書を渉猟し、選択して、それをハーンに話したのだろうか。本稿は、上記一雄著『父小泉八雲』や、「思ひ出の記」の成立事情に大きく関わりながら影武者に徹した三成重敬(1874-1962)の働きや、雨森信成(1858-1906)の英語追悼論文(“Lafcadio Hearn, the Man” *Atlantic Monthly* 1905年5月号、以下 *Atlantic*)の検討、1898年から1899年に交際があったフェノロサ夫妻、特に夫人のメアリー・フェノロサ(1865-1953)の援助を考察して、セツの果たした役割を精確に把握し直すことを目的とする。

## 1. ハーンの「再話」創作へのセツの寄与のあり方

「思ひ出の記」は、「再話」執筆における、ハーンとセツの共同作業現場について、以下のように描く。

怪談は大層好きでありまして、「怪談の書物は私の宝です」と言っていました。私は古本屋をそれからそれへと大分探しました。(中略)

私が昔話をヘルンに致します時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いて置きます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと「本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければ、いけません」と申します故、自分の物にしてしまっていなければなりませんから、夢にまで見るようになって参りました。(田部 156-59; 平川『破られた友情』137)

以上のセツの証言がそのまま信じられて、セツがハーンの「再話」著述に協力したという評価は揺るがないものとなった。

ハーンがセツに求めたのは、日本研究や、「再話」出版に向けての「インフォーマント」(「現地語による情報提供者」西8)としての役割であった。西成彦は、後述する、一雄によって発表された「思ひ出の記」執筆時の逸話を注で引用して、セツが「いざ『回想記』を書くように促されたとき、驚くほど取り乱し、あらためて自分の無学を嘆くことになった」とする(19)。西は、ハーンがセツを「霊媒」「口寄せ」的なトランス状態に置いたと見る(18)。

池田香代子も、西の説を踏まえて、ハーンがセツを意図的に「インフォーマ

ント」の位置に抑圧し、ひたすら文学の材料の提供者であることを要求したことを、「自身や小泉家の人々が描き出す、愛され、その気働きを重用された幸せな妻と、マルティニークの女中ほどにも夫の書き物に言及されない、日本文化の巫女としての篡奪の対象という両極の中間のどこかにいる。」(42)とし、セツの位置が、「自身や小泉家の描き出した」セツ像とは必ずしも一致しないことを述べる。

ハーンが執筆に何を必要としたかを、次章で考えた上で、第3章で、セツの読解力の限界と、第三者の援助について再考したい。

## 2. 雨森信成のとらえたハーンの記事作法

ハーン研究者平川祐弘は、『破られた友情』で、ハーンの記事の秘密をよくとらえていると考えられる資料があるとし、それはハーン死後の1年後、雨森信成が1905年10月号の『アトランティック・マンスリー』に書いた英文の追悼論文「人間、ラフカディオ・ハーン」であると紹介した。<sup>6</sup> 平川は、雨森の英文を「ハーンその人の英文を凌ぐばかり」(175)で読んで驚歎し、その炯眼に「その後出た内外人のいずれのハーン論よりも秀れ、かつ正鵠を射ている」(184)と高い評価をする。

雨森は、ハーンの記事執筆の心髄が、最初に「真実」(“truth”)を正直な「感じ」(“feeling”)としてつかみ、それを分析・明瞭化して著すことに全力を傾けることだ、ととらえていた。平川も、ハーンが、「材料を消化して自分自身のものとせぬ限りは、絶対それを使わなかった」ととらえている(210)。

このように雨森が明晰にとらえた、ハーンの記事作法を、私は「ハーンの記事意識」とも呼び得ると考える。雨森は、以下のように平川が表現する「正鵠を射た」指摘をする。

ハーンは、記事を推敲するというよりも、むしろ、彼自身の考えや感じを分析し明瞭にすることに意を用いた。いうならば彼は、もし明確に見えてきたら、どんな考えだろうと感じだろうと表現しおおせるという自分の能力を無意識に、意識していた。(Atlantic 514)

一旦、待望した「感じ」をつかむと、彼は、「自分に正直」であり、少なくとも「真実に近づけた」と確信した。そして、その真実を公表するためにあらゆる力を振り絞った。(Atlantic 513)

雨森がとらえたように、ハーンの執筆意識をとらえるならば、ハーンとセツとの共同創作現場とは、ハーンがセツからこの「感じ」を直接つかむ努力であったと言えるのではないだろうか。私は以下のセツの証言にハーンの意図が読み取れ、そこにこそセツの働きがあったと考える。

「アラッ、血が」あれを何度もくりかえさせました。どんな風をして言ったでしょう。その声はどんなでしょう。履物の音は何とあなたに響きますか。その夜はどんなでしたろう、私はこう思います、あなたはどうぞ、などと本に全くない事まで、いろいろと相談致します。(田部 159)

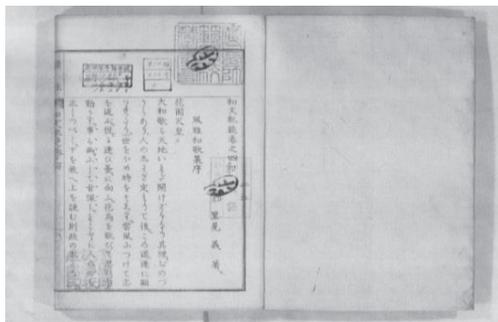
日本に生まれ、小学校の途中までの教育を受け(『父小泉八雲』142)、お話し好きであったセツから、ハーンは「日本人の感覚」を納得できるまで、聞きただしたと考える。

### 3. セツの文章能力再考

セツについて、池田香代子が「それにしても、初等教育しかうけなかったのに、よくそこまで夫の期待に応えることができたものだ。節が古書店をまわって捜し出し、読んで聞かせた版本は、ルビがふってあるとはいえ、読本風のこむずかしいものが多い」(41)と指摘するように、セツは「小學下等教科を卒業したのみで」退学を余儀なくされている(『父小泉八雲』142)。

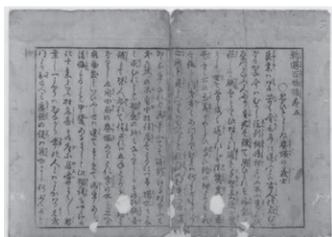
セツが受けた教育の水準を伺い知るために現在、広島大学に保存されている『和文軌範卷之四』(図1)を例示する。資料には、何年生用であるか明示されていないため、同等と推測される水準を選んだ。これを見ると、かなり高度な読みを習っていたと思われる。

(図1 『和文軌範巻四』 文部省編纂 広島大学教科書コレクション)



しかし、例えばセツの話の典拠となった版本を、ハーンの蔵書を保存する富山大学「ヘルン文庫」の「学術報告リポジトリ」で検討すると、『骨董』(1902)「おかめの話」の出典とされる『新選百物語』(図2)と、『怪談』(1904)「耳なし芳一」の出典とされる『臥遊奇談』(図3)は以下のとおりで、専門家でないと思われ。

(図2)



ヘルン文庫所蔵 『新選百物語』  
巻之三  
目次に「小泉八雲」印あり

(図3)



ヘルン文庫所蔵 『臥遊奇談』  
巻之二「琵琶秘曲泣幽霊」  
一行目の題字の下に「小泉八雲」

ハーンの世界で、日本の古典文学に典拠のある作品は、『霊の日本』(1899)から見られる(田部 235; 鈴木敏也『近代国文学素描』100)。

これらの原典について染村絢子が以下のように、二期に別れることを指摘している。

ハーンの原典について作品年代順にみると、前期の『霊の日本』、『影』、『日本雑記』の原典は、その初版が、明治のものであるか、近世のものでも明治に翻刻された『帝国文庫』に収録されたものが主体である。後期の『骨董』、『怪談』、『天の河縁起その外』に至り、これらのほか近世の版本である単行本に原典を求めるに至っている。なお雑誌『文芸倶楽部』に原典を求めたのも、この期である。(『へるん』 24号 62)

私は、後期(1902以降)の作品の典拠の読解に、東大の史料編纂部に長年勤務し、古版本、漢籍に詳しく、ハーン家に出入りしていた、セツの遠縁の、三成重敬の協力の可能性を否定できないと考える。三成はセツの遠縁に当たり、やはりセツの遠縁の法学士、梅謙次郎を介してハーンに紹介されたとする(『事典』614-16)。時期は「年譜」において、1901年(『事典』723)となっており、一雄の「是は父の死ぬ兩三年前の事であつた。」(133)という証言と一致しており、1901年と考えられる。作品としては、1902年の『骨董』以降という染村の指摘と一致する。

三成の手助けを推測する第一の根拠は、まず、セツの手による書き込みの拙さである。長谷川洋二は、『八雲の妻』<sup>7</sup>において、『骨董』所収の「常識」の典拠となった『宇治拾遺物語抄』「獵師、佛を射る事」への書き込みを指摘する(図4、5、6)。「菩薩」に対して「ぼさち」(傍点長谷川)とあり、これは「前所有者のものとは思われない」「セツの手になることを疑う余地はない」としている(218)。この例は、セツが「菩薩」を読めなかったことと、イ段とウ段の混同する出雲方言による<sup>8</sup>と思われる。これはセツが「ぼさち」と読む事しか理解できないことを示し、古文を読みこなすレベルとはほど遠いことを示している。長谷川は、「おこなふ聖」「年比」「坊」「餌袋」の意味が書き込まれているとし(217-18)、以下の図4~6で確認できた。また、その他にも、『宇治拾遺物語抄』上・下の書き込みを指摘している(217)。デジタル資料で確認すると以下のような例がある。

上、「志とみ」(戸) 82頁、「つゆ」(少しも) 83頁

下、「かたみ」(乞食) 11頁、「らうたげ」(可愛らしく) 13頁、

「あてやか」(上品一品は下の口が繋がっている) 24頁

これらの例はまさしく長谷川の指摘するように「セツの手になることを疑う余地はないものと思われる」と考える(218)。長谷川は「これは、セツが質問した第三者の答えであろう。筆跡で判ずることは困難だが、あるいはその人の手

になるものかも知れない。」と、セツ以外の第三者の助けを示唆している(218)。

(図 4)



(図 5)



(図 6)



富山大学学術情報リポジトリ ヘルン文庫蔵書 『宇治拾遺物語抄』下巻より

(図 4 表紙) (図 5 目次) (図 6 一「獵師、佛を射る事」)

目次に「小泉八雲」印あり。(図 6) に書き込みが見られる。

つまり、『日本雑記』(1901)の原典である翻刻版までは、セツが読めた可能性があるが、『骨董』以降の近世の版本は三成の援助の可能性があると考える。

三成と一緒に住んだことのあるという、遠縁の後藤昇<sup>9</sup>は、三成が、「セツに日頃からハーンらしい日常をメモしておくように」と進言していたとする(『へるん』21号)。これはまた別の意味で重要性を帯びる。即ちこれは、三成がセツへの進言が可能な位置をハーン家で占めていて、三成による古書の紹介という役割を担っていたことを推測させる。

それでは、三成の援助が反映すると思われる以前の、染村の言う前期にあたる『霊の日本』(1899)、『影』(1900)、『日本雑記』の三冊は、セツ一人による原典の紹介であったのかという問題が残る。

この期間のハーンの三冊については、ハーン自身が再話の典拠を作品中に示している。ハーンの説明と原典とを比較すると、以下のように、読み間違いに混じって、中国音の読みや、「能」への言及、英文の典拠の指摘が発見された。(傍線は中井による。)このことから典拠の提示には、セツだけではなく、中国語、英語、「能」に詳しい人物が想定される。

まず『霊の日本』について、ハーンは「占いの話」で「易经」(エキキョウ)を“*Yi-King*”と示し(50)、「邵康節」(ショウ・コーセツ)を、「ショーコ・

セツ) (“Shōko Setsu”)と中国人の姓と名の区切り方を知らない読みをする(52)。またハーンは、「天狗の話」を注で「能」(“Nō-play”)にあるとし、「大絵」「*Dai-É*”ダイエ)を「優れた絵 (“The Great Picture”) とするが、しかし「能」の演目は「大会・ダイエ」(大法要)である。またこの注で「天狗」について、仏教では“Mārakāyikas”に属す等、詳しく説明する(215)。

次に『影』においては、「和解」(5)と「死骸に乗った人」(33)の典拠『今昔物語』を、ハーンは「コンセキモノガタリ」と紹介する。また、「死骸に乗った人」で、「陰陽師」(オンミョウジ)を「“inyōshi” インヨーシ」と読んでいる(34、35、37)。また、「衝立の女」で「菱川師宣」を、「ヒシガワ」と読み(24)、「弁天の同情」で「俊成」(シュンゼイ)を「シュンレイ」と読み(43)、「鮫人の感謝」で『戯文』を「キブン」<sup>10</sup>と読む(58)。以上の読み違いに混じって、ハーンは、「普賢菩薩の話」の注で「僧侶の願いは恐らく『サマンタパドラの励まし』と題する章の影響がある。」とし、カーン(“Kern”)の翻訳英文の典拠(“*Sacred Books of the East*, pp. 433-34”)を示す(16)。

『日本雑記』では「閻魔の庁にて」と(34)、「梅津忠兵衛」で(56)、典拠『仏教百科全書』の「ショ」を「ショウ」と読む。「閻魔の庁にて」では、「布敷臣」(ヌノシキノオミ)を「フシキノシン」と読み、「衣女」(キヌメ)を「キン・ウメ」と解釈して「金梅 “Golden Plum-Flower”) とする(30)。

以上の、典拠・登場人物の読み違いが、セツによるかどうかについての判定は、今後の課題である。

しかし、ちょうど、上記三作の執筆の時期である1898年から1899年に、ハーンとフェノロサ夫妻との交流があり、『霊の日本』冒頭の「断片」は夫人メアリーにより(村形『英文学評論』61)他にも、メアリーからの情報提供が伺われる(村形329-31; 山口146-50)。メアリーは、ハーンの死後、1915年から1918年の執筆と村形明子が推定する(『英文学評論』68)、「夕霧お客さん」という手記を発表した。その中でメアリーは、ハーンへの仏教説話を用意して、訪問を待っていたことを書いている。

「ハーン氏！」嬉しくて声が響き渡った。「すぐにお通しして、鈴木。新しいお茶とお菓子をお持ちして。私もすばらしい仏教説話を用意してあるの。」

(“Mr. Hearn!” I echo, joyously, “Show him in ay once, Suzuki. Have fresh tea made, and get some of those good little cakes. I have a wonderful Buddhist legend for him, too.”) (『へるん』27号、105-06)

メアリーは、以上のような訪問が1899年の1月に一番多かった、とこの「手記」

で述べている(106)。<sup>11</sup> 山口静一は、新たに発見された手紙、メアリーがハーンを友人の送別会に誘う手紙(1898年5月26日付)を以下のように説明する。

少なくともフェノロサ夫人は交際嫌いで有名なハーンにこの種の呼び出し状を送りつけても不自然でないほどの関係にあったことがわかる。前掲の日記(メアリーの日記—中井)でもこのころ彼らが互いに文学書の貸し借りを行っていたことを伝えているし、書簡集に収録された三通の夫人宛書簡からも、両者の話題が次第に真剣な文学論に移って行ったことを推定できる。(『フェノロサ』下150)

また、山口は「ハーンとその家族にとって『フェノロサ』と言えば『フェノロサ夫人』を意味するほど、夫人がハーンの崇拜者であった」と推測している(『講座』1:396)。

英文の仏典を指摘でき、『易経』を中国音で読めるのは、1898年から能楽、1899年から中国詩を夫、アーネスト・フェノロサと研究し始め、夫の死後、『東亜美術史綱』(“*Epochs of Chinese and Japanese Art*”1912、『事典』517)を編纂したメアリーの可能性が推測される。<sup>12</sup>

セツへの援助者の存在を推測する第二の根拠は、「思ひ出の記」の執筆事情に、以下のようにセツの文章力の欠如が疑われることである。セツの「思ひ出の記」の作成ははかどらず、セツの口述を三成が筆記して「口述メモ」を作り、書き直し清書した。日本語版の出版(田部『小泉八雲』所収1914)の36年後に、一雄は、以下のようにその実情を述べる。<sup>13</sup>

最初、母は到底自分には斯る能力の無い事を知ってお断り申すと云つたのを、「ママアそう云わず、故先生への最後の御奉公だと思つておやりなさい。文章の點は乍不肖御援助しますから」と駄々ッ子をなだめる様に三成氏が諭して、遂に母の口を通して種々語らせ、是を氏が筆記して——其間にも幾度か母は放擲しようとしたが——漸く「思ひ出の記」はなったのであった。(『父小泉八雲』139)

「思ひ出の記」の手伝い方が三成であったことを、坪内逍遙に見抜かれたことが、逍遙の閲覧後、使いした一雄によって「ダア。先生は何も彼も御存じなのだ、と其慧眼に恐れ入った。」と書かれている(『父小泉八雲』143-44)。

三成自身も逍遙に見抜かれたことを知って、「流石は逍遙とその炯眼に敬服していた」と、後藤昂が証言する(『へるん』21号12)。このような、セツに文

章力がなかったという逍遙の間接の証言は、セツの版本選びに他人の協力があつたことをも示唆するであろう。

さらに後藤は、「思ひ出の記」の完成後の三成の行動に重要な証言をしている。

「思ひ出の記」が完成するや、小泉家への出入りをぶつつり断ってしまった。<sup>14</sup>セツ子は幾度も相談を求めたが応じなかった。或秋三成の出張先の奈良に迄出かけたが、三成は会わなかった。清<sup>15</sup>より母危篤の知らせがあつた時も行かなかつた。三成の心中は謎である。(『へるん』 21号 13)

三成の行動に関して、後藤は「謎」とする。しかし、これだけ断固とした行動には理由が存在するはずである。私の推測では、三成は、「思ひ出の記」の作成に関して、セツを助けたことを隠したかっただけではなく、遡ってハーンの「再話」の材料提供に関わつたことを表に出したくなかつたことが推測される。

セツの「再話」への貢献の実態を考えなければならない第三の根拠は、中田賢次の研究によると、「耳なし芳一」の実際の典拠には複数の存在が考えられ、セツが述べたように「もとは短い物であつたのをあんなに致しました。」(田部159)というような単純明快な経過をたどつて、できあがつた「再話」とは言い難い点があることである。

中田は、原話とハーンの再話を比較した先行研究全般の比較から、田部の最初に指摘した原話である『臥遊奇談』の「琵琶秘曲泣幽霊」(図3)が、「単純過ぎて、再話と原話の差異はおおきいといわねばならない」と論ずる。中田は、広瀬朝光が影響を指摘する、ハーン文庫にある『御伽厚化粧』巻之四所収の「赤関留\_幽鬼\_」<sup>16</sup>に「ハーンの再話に近い描写をとる箇所が散見される」ことに注目している(136-37)。

本稿は中田の指摘する次の諸点に注目する。それは、池田弥三郎が「徳島県板野郡里浦村に伝わる『耳切団一』の話を紹介している」こと(137)や、柳田国男が「瀬戸内海殊に壇の浦周囲が、平家座頭の発祥の地」であつたであろうとすることや、『琵琶秘曲泣幽霊』のような話は各地に点在した」ことを指摘していることである(137-38)。中田は以上の資料を踏まえて、「ハーンが、平家一門潰滅の水路であつた関門海峡を幾度か渡っている」ことを指摘し、「原話は単数ではなく、夙に母体となるべきイメージ」に「琵琶秘曲泣幽霊」が加わつて再話に結実したという説を提示した(138)。つまり複数の原典が絡み合つた結果とする。

中田の説を踏まえると、「耳なし芳一」は、セツが「思ひ出の記」で述べたセ

ツの語りによるだけでなく、三成による典拠選択の援助や、「母体となるべきイメージ」に「琵琶秘曲泣幽霊」が加わって「再話」として完成されたと考えられる。

## 結論

一雄は『父小泉八雲』において、三成の働きを「いつも縁の下の大力持で、田部氏の八雲傳が出来る時にも陰で盛んに采配を振られた。」(139)とし、「母に取って全くの影武者であつた。(中略)蓋し八雲の傳記作家田部隆次氏は何等御存じない筈。」と、セツにとっての「影武者」であったことを認めている(138)。本稿の推定する、『骨董』以降の古典選択における三成の援助の傍証となると考える。

雨森は、ハーンの記事執筆意識と思想について、ハーンの死の1年後、1905年上述の「人間、ラフカディオ・ハーン」で著し、その1年後に他界した。雨森はその追悼論文において、自分の提供した神道や仏教についての具体的な内容を除いては、積極的にハーンの手紙からの引用を心がけている(*Atlantic* 510)。しかし平川によれば、「律儀な明治の人雨森は、自分が素材を提供したことを明かせば、ハーンの仕事の実相が世間に知れ、ハーンの名声に疵がつくことをおそれて、その間の経緯は一切伏せてしまった」(『破られた友情』 215)と指摘されている。

このように、三成も雨森も、ハーンの記事執筆に欠くことのできない働きをしたにもかかわらず、ハーンの記事執筆に力を貸すことができたことを誇りとして胸にしまいこみ、その「気配」を消してしまった。

森亮は、ハーンが『日本瞥見記』「日本人の微笑」に、「教養ある日本人というのは、あまり自分のことは言わない。」ことを紹介する(*Glimpses* 672; 森67)。ハーンはここで日本人の一般論を述べたに過ぎない。しかし、ハーンの死後の三成と雨森の行動はまさにそれであったと言える。

ハーンの記事『霊の日本』から『日本雑記』には、メアリーの助けが推測され、『骨董』以降には版本が読めた三成の助けを借りて選んだと考えられる。セツの担った重要な役割は、ハーンが、「日本人の意識」を「感じ」としてつかめるまで、掘り下げるための疑問に答えることであったと考える。そうすれば、既存の説では説明のつかない疑問が解け、ハーンの記事執筆意識とも一致する。

本稿は、小泉一雄、三成信成、雨森重敬、メアリー・フェノロサの証言と行動を検討して、「思ひ出の記」の作成にかかわる事実を推定した。この推定した

事実に基づいてセツの役割の範囲を再考した。

## 注

- 1 戸籍上は「セツ」である。一雄は「母の名を節子と書く人が多い。母自らも斯く書いているが、戸籍面ではセツである。」とする(『父小泉八雲』152)。
- 2 セツの結婚については、長谷川洋二『八雲の妻』に詳細な聞き取り調査がある。「2月頃ハーンの家に住むようになった」というのが現在の定説である(123-40)。
- 3 「再話」は、翻訳家平井呈一が名づけたハーンの創作手法である。“retold tales”、“twice-told stories”を意味し、「明らかに原典があって、その原典を語り直した作品」の呼び名として定着している。(平井呈一『全訳小泉八雲作品集』第九巻638-43)。
- 4 例えば、セツの遠縁に当たる後藤は、「戦後、節子を『日本婦人の亀鑑』とする映画製作」の試みの存在を証言し(『へるん』20号5)、1984年にはNHKが、また1991年には「地人会」による演劇『日本の面影』が評判を博した(『事典』82)。
- 5 小泉一雄著『父小泉八雲』(1950)は、評価が一定しない。森亮は、『小泉八雲の文学』で、「異様に動いたお化けたちの列伝」(160、114-15)としながらも、「宝石のように光っている材料が無数にある。」(162)と高く評価し引用もする。遠田勝は「一般読者向けでない」(『事典』375)とする。長谷川洋二は「伝記の資料とすることを困難にしている」として参照しないとする(300)。ただし、引用する箇所がある(127、141、209)。本稿は、この書を無視する理由を見いだせないため、参照・検討し引用する。
- 6 この雨森信成の英語追悼論文は、高田力訳の『小泉八雲の横顔』(北星堂、1934)に収められていることが、森亮によって示される(99)。その後、平川祐弘による『小泉八雲 回想と研究』に、仙北谷晃一訳が編集されている。以下、英文の翻訳は、断りのない限り稿者による。
- 7 『八雲の妻』は、セツの働きを「健気に書物に取り組み、奮闘した。そして読んだ話を『語る』技量を高め、驚くべき域に達したことが、資料から推察される。」(213)ことを証明する意図で書かれている。本稿は、その「証拠」が却って、版本を渉猟するレベルとほど遠いことを、はしなくも表してしまっていると考える。
- 8 『父小泉八雲』に、セツの出雲方言についての言及がある(147)。「出雲地

- 方と言語（方言）」<<http://ekiji.net/amanoiwayato/entry13.html>> によると「イ段」と「ウ段」の混同が起きるといふ。
- 9 後藤昂は、叔父の玉木光栄のいここにあたる三成重敬と、1934年から1940年に、同居していたため、身近な情報に詳しい。本稿は後藤の『へるん』19号、20号、21号の記事を参考にした。
  - 10 旧表記では濁点を示さないため、「きぶん」と振り仮名を付けたと考えられる。また、作者滝沢馬琴も「ぎぶん」と「きぶん」を掛けたと思われる。
  - 11 村形は「それにもかかわらず、メアリーの日記には、ハーンの1月の訪問の記述がない」ことを指摘している（『英文學評論』66）。
  - 12 『東亜美術史綱』にも、“Y-King”が見られる（1: xxix）。「菱川師宣」については、「ヒシカワ」（2: 186、201）「ヒシガワ」（2: 201）の両者が見られる。
  - 13 森亮は、セツについて「必ずしも常につつましやかでなかった」上に、「更に幻滅を感じさせるのは、（中略）『思ひ出の記』は夫人の口述であるが、あれだけ平易なうちに達意な名文になったのは、筆記に当たった遠縁の三成重敬氏の功に帰すべきものらしいことである。」（160-61）と新事実をそのまま受けとめている。
  - 14 後藤昂は『へるん』20号において『思ひ出の記』以降も「相談」相手であったとし、議論が残る（5）。
  - 15 小泉清（1899-1962）は、ハーンの三男で、三成の葬儀の日に自死している（『事典』616）。美校在学中、一雄とセツから勘当されて以来、三成重敬が清を長年にわたって経済的、精神的に援助してきた事情は、1928-1961年に清から三成に出された30通の書簡を保管していた後藤昂著「小泉清の死」『へるん』20号に詳しい。
  - 16 ヘルン文庫、「富山大学学術情報リポジトリ」にて確認できる。

## 引用文献

- Amenomori, Nobushige. “Lafcadio Hearn, the Man.” *Atlantic Monthly*. Oct. Boston; New York: Houghton, Cambridge: Riverside, 1905. Print.
- Fenollosa, Ernest. *Epochs of Chinese and Japanese Art: An Outline History of East Asiatic Design*. 2 vols. Ed. Professor Petrucci. New York: Dover, 1963. Print.  
（『東亜美術史綱』）
- Fenollosa, Mary. “Yugiri O Kyakusan” (The Guest who comes with the Twilight).

- 『へるん』27号、東京：恒文社、1990
- Hearn, Lafcadio. *In Ghostly Japan*. Boston: Little, Brown, 1899. Print. (『霊の日本』)
- . *Shadowings*. Boston: Little, Brown, 1900. Print. (『影』)
- . *A Japanese Miscellany*. Boston: Little, Brown, 1901. Print. (『日本雑記』)
- . *Kottō: Being Japanese Curios, with Sundry Cobwebs*. London: Macmillan, 1902. Print. (『骨董』)
- . *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*. Boston; New York: Houghton, 1904. Print. (『怪談』)
- 雨森信成「人間ラフカディオ・ハーン」仙北谷晃一訳、平川祐弘編『小泉八雲 回想と研究』東京：講談社、1992
- 池田香代子『「へるん」な外人』という翻訳現象『國文學 解釈と教材の研究』東京：學燈社、1988、7月号
- 「出雲地方と言語（方言）」(2016年8月18日閲覧)  
<<http://ekiji.net/amanoiwayato/entry13.html>>
- 『宇治拾遺物語抄』「へるん文庫」富山大学学術情報リポジトリ (2016年8月2日閲覧) <<https://toyama.repo.nii.ac.jp/>>
- 『御伽厚化粧』倉員生江・佐伯孝弘編・解説、東京：東京クレス出版、2008
- 『臥遊奇談』巻2「琵琶秘曲泣幽霊」『京都大学蔵 大惣本稀書集成』第8巻、京都：臨川書店、1995
- 『臥遊奇談』「へるん文庫」富山大学学術情報リポジトリ (2016年5月25日閲覧) <<https://toyama.repo.nii.ac.jp/>>
- 小泉一雄『父小泉八雲』東京：小山書店、1950
- 小泉セツ「思ひ出の記」田部隆次『小泉八雲』(第一版 1914) 所収 (145-77) 東京：北星堂書店、1980
- 後藤昂「梅謙次郎と八雲のことなど」『へるん』19号、松江：八雲会事務局、1982
- 「小泉清の死」『へるん』20号、松江：八雲会事務局、1983
- 「せつ子の『思ひ出の記』と三成重敬」『へるん』21号、松江：八雲会事務局、1984
- 『新選百物語』「へるん文庫」富山大学学術情報リポジトリ (2016年5月25日閲覧) <<https://toyama.repo.nii.ac.jp/>>
- 鈴木敏也『近代國文學素描』東京：目黒書店、1934
- 染村絢子「ハーン作品の原典について」『へるん』24号、松江：八雲会、1987
- 田辺隆次『小泉八雲』東京：北星堂書店、1980
- 中田賢次『「耳なし芳一の話」の原話をめぐって』『比較文學研究』第47号、東

- 大比較文學會編集、東京：朝日出版社、1985
- 西成彦「語る女の系譜」『比較文學研究』第60号、東大比較文學會編集、東京：朝日出版社、1991
- 長谷川洋二『八雲の妻：小泉セツの生涯』松江：今井書店、2014
- 平井呈一訳『全訳小泉八雲作品集』第九卷、東京：恒文社、1964
- 平川祐弘『破られた友情：ハーンとチェンバレンの日本理解』東京：新潮社、1987
- 監修『小泉八雲事典』東京：恒文社、2000（略称『事典』）
- 森亮『小泉八雲の文学』東京：恒文社、1980
- 村形明子“Yugiri O Kyaku San (The Guest who leaves with the Twilight): The Fenollosas and Lafcadio Hearn.”『英文學評論』61集、京都大学教養部英語教室、1991
- 山口静一『フェノロサ：日本文化の宣揚に捧げた一生』下、東京：三省堂、1982
- 『講座小泉八雲 I—ハーンの人と周辺』平川祐弘・牧野陽子編、東京：新曜社、2009
- 『和文規範』巻四 文部省編纂 1884 広島大学教科書コレクション（2016年10月21日閲覧）
- <<http://dc.lib.hiroshima-u.ac.jp/text/detail/83520141210155401>>

